

報告

様似町アポイ岳山頂で確認されたツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius*

On the occupancy activity of *Argyreus hyperbius* seen at the summit of Mt. Apoi in Samani Town.



河野 潤^{1*}
Jun Kohno^{1*}

Report

2022年12月6日 受付, 2023年7月10日 受理

要旨

2022年9月10日、様似町アポイ岳（標高810m）で、ツマグロヒョウモンを確認した。また、アポイ岳山頂部かららん岩上での占有行動を観察した。ツマグロヒョウモンは2022年6～10月に北海道南部で大量発生の報告があるが、日高管内においては初めての記録である。

Abstract

On September 10, 2022, I encountered *Argyreus hyperbius* at Mt. Apoi (elevation 810m) in Samani Town. I observed territorial behavior on the peridotite at the summit of Mt. Apoi. Although there are reports of large-scale outbreaks of *Argyreus hyperbius* in southern Hokkaido from June to October 2022, this is the first record in the Hidaka jurisdiction.

キーワード：ツマグロヒョウモン, 迷蝶, アポイ岳
Keywords: *Argyreus hyperbius*, Lost butterfly, Mt. Apoi

はじめに

ツマグロヒョウモン *Argyreus hyperbius* は、タテハチョウ科ヒョウモンチョウ族 *Argynnini* のチョウで、インド・インドシナ半島・中国・朝鮮半島・日本までの熱帯から温帯域に広く分布し、日本は分布の北限に当たる。西南日本では普通種となり、南西諸島では以前から分布する唯一のヒョウモンチョウであるが、関東地方まで1990年代から分布を広げ、個体数が増加している（白水, 2006）。また令和2年度河川環境データベースによると、東北地方まで分布を拡大している（国土交通省 a, b, 2022）。

2022年には、北海道内で多数のツマグロヒョウモンが記録された。8月21日には函館工業高等学校生物部の部



図1. 五合目避難小屋の前からアポイ岳を望む。
Fig. 1. View of Mt. Apoi from in front of the 5th station refuge hut.

1: 自然愛好家, 北海道北広島市白樺町 2-18-12
Freelance Naturalist, 2-18-12, shirakaba-cho, Kitahiroshima, Hokkaido 061-1144, Japan

* Corresponding author E-mail address: jankow@ab.auone-net.jp



図 2. かんらん岩上のツマグロヒョウモン。
Fig. 2. *Argyreus hyperbius* on peridotite.



図 3. 占有行動中のツマグロヒョウモン。
Fig. 3. *Argyreus hyperbius* watching its territory.

員 3 名が函館山にて 3 頭を採集（北海道新聞，2022 年 9 月 16 日朝刊函館版第 16 面），2022 年の 6 月 10 日に檜山管内乙部町で初めの採集報告が，追って 10 月までに渡島管内函館市・福島町・松前町など，北海道南部地域にて計 86 頭が採集，また室蘭市で 1 件の目撃情報があったことが明らかとなっている（北海道新聞，2022 年 11 月 26 日朝刊第 4 社会版第 30 面）。

様似町アポイ岳山頂にて ツマグロヒョウモン目撃

日高管内様似町アポイ岳（標高 810m，図 1）で確認されたツマグロヒョウモンについて報告する。2022 年 9 月 10 日午前 11 時頃，頂上のかんらん岩上に，ツマグロヒョウモンのオス 1 頭が静止しているのを確認した（図 2，3）。確認した個体は，後翅の一部が破損しているものの，比較的新鮮な個体と思われた。この個体は，一旦飛んでから再び同じ場所または付近のかんらん岩に静止することを繰り返す，いわゆる占有行動を見せていた（図 3）。筆者は 4 月下旬から 9 月までのほぼ毎週アポイ岳を踏査しており，ツマグロヒョウモンを確認した前日・前々日の 9 月 8 日・9 日，4 日後の 9 月 14 日にも山頂を踏査したが，その際はツマグロヒョウモンを確認できなかった。

ツマグロヒョウモンの記録拡大について

ツマグロヒョウモンは，1975 年頃には愛知～静岡県付近が太平洋側の土着北限とされていたが，1990 年頃から急速に関東～東北地方を北上し，その分布域が著しく拡大している（井上，2016）。幼虫が越冬する冬季間の最

低気温の上昇とともに，食草として利用しているパンジーの栽培方法の変化と，その苗の移動が顕著に拡大したことが，この分布拡大を助長した可能性があることが示唆されている（津吹，2016；望月・山口，2021）。北海道内でも函館市など渡島管内のほか札幌市や阿寒湖周辺，帯広市など，近年確認が増加傾向であった（永盛ほか，2016；永盛ほか，2020）。

ツマグロヒョウモンは，スマレ類を幼虫時の食草とする。アポイ岳一帯には，ケタチツボスミレ，ファイリミヤマスマレ，アポイタチツボスミレ，エゾキスマレのスマレ類が分布しており，それを食草として発生した可能性もある。また様似町内では春からパンジー苗が販売（DCM ニコット様似店談）されており，広く花壇などに植えられているので，様似町内もしくは他地域の低所で発生したものが，山頂まで吹き上げられた可能性もあると考えられる。今回の目撃記録が，道南での増加の影響であるとは証明はできないものの，少なくとも記録及び分布の拡大，さらに低地から山頂部へのオスの移動力の高さを示していると考えて，ここに報告した。

謝辞 北海道教育大学旭川校非常勤講師 永盛俊行氏には，ツマグロヒョウモンの記録拡大についてご教示いただいた。アポイ岳ジオパークビジターセンター学芸員 水永優紀氏には，ヒメチャマダラセセリ保全活動から続く動植物の観察をする際に便宜頂いた。共に深く謝意を表したい。

引用文献

北海道新聞，2022 年 9 月 16 日朝刊，函館版（第 16 面）。
北海道新聞，2022 年 11 月 26 日朝刊，第 4 社会版（第

30面).

井上大成, 2016, 様々な要因によるチョウの分布拡大.

井上大成・石井 実編『チョウの分布拡大』, 北隆館,
8-32.

国土交通省 a, 2022, 7. 陸上昆虫類等調査の概要

<https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/mizukokudam/download/2020/08_konchu.pdf>. 令和 2
年度河川水辺の国勢調査[ダム湖版]
<<https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/mizukokudam/download/R02.htm>> (アクセス日: 2023
年6月13日).

国土交通省 b, 2022, 6. 陸上昆虫類等調査

<<https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/mizukokuweb/download/pdf/gaiyo/R02/R2-260konchu.pdf>>. 令和 2 年度河川水辺の国勢調査 [河川版]
<<https://www.nilim.go.jp/lab/fbg/ksnkankyo/mizukokuweb/download/R02.htm>> (アクセス日: 2023
年6月13日).

望月博美・山口隆子, 2021, ツマグロヒョウモンの北

上に関する生気候学的研究. 日本生気象学会雑誌,
57, 135-141.

永盛俊行・永盛拓行・芝田 翼・黒田 哲・石黒 誠,

2016, 第II部各種解説追補種. 追補種. 『完本北海道
蝶類図鑑』, 北海道大学出版会, 290-295.

永盛俊行・芝田 翼・辻 規男・石黒 誠, 2020, I. 標

本図版. 迷蝶. 『北海道の蝶』, 北海道大学出版会, 43.

白水 隆, 2006, ツマグロヒョウモン. 『日本産蝶類標

準図鑑』, 学習研究社, 220.

津吹 卓, 2016, ツマグロヒョウモンはなぜ北上したの

か. 井上大成・石井 実編『チョウの分布拡大』, 北隆館,
93-103.